

対話についての10の掟（十戒）

諸宗教と諸イデオロギーの対話の基本的ルール

レナード・スウィドラー

ここに紹介するのは、**深い対話**というものが登場する以前のいわゆる「対話の十戒」のクラシック版です。またここでは「頭のレベルでの対話」に焦点が当てられています。（手、心、聖なる現実の対話もある。“深い対話—批判的考察・競争と協力—もっとも正しく人間らしいアプローチ” 参照 *Journal of Ecumenical Studies*, 47, 2, Spring, 2012, pp. 143-151):

4つの土台をアプローチとする最初のバージョンは「諸宗教対話の根本ルール」として *Journal of Ecumenical Studies* 15, 3 (Summer, 1978), pp. 413f.; に発表され、さらに「対話の十戒：諸宗教・諸イデオロギー対話の根本ルール」として *Journal of Ecumenical Studies* 20,1 (Winter, 1983), pp. 1-4; に発表されました。1984年以降、タイトルは一貫して「対話の十戒：諸宗教、諸イデオロギー対話の基本ルール」として扱われてきました。この掟は、39の出版物を通して紹介され、少なくとも9カ国語に翻訳されています。きわめて常識的なガイドラインが「対話の十戒」として紹介されたのは、少なくともユダヤ人、クリスチャン、ムスリムにとって「十戒」は、新しいものではなく、またDDという略称も、覚えやすいようにという教育的な配慮からでした。

対話とは、違う意見を持つ二人あるいは複数の人間が、共通の話題について話しあうことを意味します。第一の目的は、各自が相手から学び、自分の意見を変え、成長するためです。対話をこのように定義することが、対話の第一戒です。

諸宗教対話の歴史を振り返ると、意見の違う者たちが集まるのは、たとえばカトリックとプロテスタントが相手を「負かす」あるいは、相手を知ることによって、より効果的に問題に取り組むか、せいぜい、うまく交渉することが目的だったようです。向き合うことは、対立を意味し、それが正面からの対立か、あるいは柔らかな姿勢があっても、つねに相手を「負かす」ことが、最終的な目的でした。それは自分が絶対的に正しいと確信していたからです。

しかし対話は討論ではないのです。対話において、各自はできるだけ相手の立場を正しく理解するために、注意深く耳を傾けます。このような姿勢を生き抜くならば、相手の立場や言い分が明らかに納得出来る場合、自分が意見を変えるようになりますが、これは易しいことではありません。

ここで触れているのは、諸宗教あるいは諸イデオロギー対話です。つまり「生きることの究極的な意味と、どのように生きるか」について話しあうためには、各自が信仰共同体あるいはあるイデオロギーを信じて生きるグループに属していることが大切です。もしクリスチャンとマルキシストの対話であるならば、参加する人はクリスチャンあるいはマルキシストでなければなりません。インフォメーションとして参加し、なんらかの意見を述べることはできても、本当に対話にはならないでしょう。

確かに、諸宗教対話とか諸イデオロギー対話は、ごく新しい分野で、過去においても、このような考えも実践も存在しませんでした。ではどのようにこの新しい課題に取り組むことができるのでしょうか。具体的に取り組むための基本的ルールをあげてみます。これらは、理論的なルールでも、上から与えられた命令でもなく、実際に体験から洗い出されたものです。

第一戒 対話の第一目的は、現実についての見方、理解を変え、学び、それに従って行動すること。すくなくとも、対話の相手が「これ」ではなく「あれーこれではないもの」を信じていることを知り、それによって相手にたいする自分の態度が変わる、この変化は意味のあるもの。対話によって、学び、変わり、成長する、討論のように相手を変えたいという望みから、自分の考えを押し付けるのではない。この場合、相手を変えたいという望みは、討論の頻度と強引な強さに反比例して実現する。一方、対話においては、各自が相手から学ぶことによって自分が変わるという姿勢が、結果的には相手も変わるという結果をもたらし、これによって討論が目指したものが、より効果的に実現されることになる。

第二戒 諸宗教、諸イデオロギー対話は、それぞれの宗教団体あるいはイデオロギーグループ内部で、また宗教とイデオロギーのたがいの対話を意味するもので、二つの側面を持つ対話である。諸宗教対話の主体は共同体であること、対話の主要目的は、たがいに学び、変わることを目指すため、対話は、たとえばルーテル教会対英国国教会ということだけでなく、教団内でも諸宗教対話からの学びをわかちあうことが必要である。このように、教団全体が、学び、変わり、現実をたいしてより深い洞察を得ることができるようになる。

第三戒 対話の参加者は、完全な正直さと誠実な姿勢を持たなければならない。対話の方向が、伝統から大きく、あるいは控えめに踏み出すのか、どのような未来に向かって歩むのか、あるいは必要ならば、参加者が自分自身の教団に感じている困難にも直面するのか、などのいずれも対話を留める限界にはなりえない。一方、**参加者は、相手が完全に正直で誠実であることを信じて参加しなければならない。**誠実な姿勢がなければ、対話は実現し得ないし、相手の誠実さを信じることなしにも、対話は成立しない。つまり、信頼がなければ対話は不可能ということだ。

第四戒 諸宗教、諸イデオロギー対話において、相手の理想を实践とくらべるべきではない。むしろ、くらべるのは、自分の理想と相手の理想、そして自分の実践と相手の実践である。たとえば、生きた「寡婦」を焼き殺す古いヒンズー教の伝統（サティー）とキリスト教の魔女殺し、異端審問の処罰など。

第五戒 参加者一人ひとは、自分自身が誰であるかをはっきりと定義しなければならない。ユダヤ人だけが、ユダヤ人とは何かを定義することができるが、それ以外の参加者は、ユダヤ人とは何かを外から見た印象を述べるにとどまる。対話は、ダイナミックな方法であるので、参加者一人ひとりが学び、それによって変わり、自分自身を深めることによって、ユダヤ人であることの新たな定義づけをすることができる。もちろん、そのためには、自分以外のユダヤ人と対話し続けることが必要である。このように、対話に参加する一人ひとりが、自分の伝統の真のメンバーとは何かを確認しなければならない。

おなじように、**他者による自分のアイデンティティについての説明を受け入れ、そこに自分の姿を認めることも重要である。**「諸宗教対話の使徒」と呼ばれたライムンド・パニカーは、これこそ、諸宗教対話の黄金律であると述べてい

る。理解を深めるために、対話の参加者は、自分が相手 の言葉をこのように理解したと表現し、同時に相手の表現に自分を認めることが必要である。世界神学の提唱者であるウィルフレッド・キアントウェル・スミス は、このような表現が、対話に参加していない第三者であるクリティカルなオブザーバーによって検証されなければならないと述べている。

第六戒 参加者は、意見の違いについて、動かしがたい思い込みを持たずに対話にのぞむべきである。開いた心と共感をもって相手に耳を傾げるだけでなく、自分自身の伝統を正直に守りながら、できるだけ相手に同意するように努力する。自分自身の伝統を裏切ら ずには、これ以上同意できないところまで来たときに、そこにこそ同意できない壁に向き合う。しかしこの違いは、しばしば対話を始める前に考えていた不賛成 と一致しない場合が多い。

第七戒 対話は、たがいに学ぶために出会う対等の関係においてのみ、可能である。これは第二バチカン公会議（1962 – 1965）が述べたpar cum pari 対等の関係である。たがいに相手から学ぶために出会う。したがって、もしムスリムが、ヒンズー教徒を、あるいはヒンズー教徒がムスリムを、対等 の相手でなく、下に見るならば対話は成立しえない。ムスリムとヒンズー教徒の間に真実の諸宗教対話あるいは諸イデオロギー対話が成立するならば、同等であ る相手から学ぶ姿勢を生きななければならない。つまり一方通行の対話というものには存在しない。たとえば、1960年代に始まったユダヤ教とキリスト教対話 は、諸宗教対話の前座にすぎなかった。当時は、ユダヤ人が、クリスチャンに教え、クリスチャンはただ学ぶためにやってきたが、真のユダヤ教キリスト教対話 は、ユダヤ人も同じく学ぶために、対等の相手として参加しなければならない。

第八戒 対話はたがいの信頼関係を土台とする。このような課題への取り組みは、共通の基盤を創り、人間としての信頼関係を實現する。諸 宗教、諸イデオロギー対話には、なんらかの「共通」面が必要である。参加者は、宗教団体あるいは、同一イデオロギーを基盤とする共同体に属しているが、対 話に参加するのは、あくまでも一人ひとりの個人である。人間同士の対話は、人間としての信頼関係を土台とする。そのため最初から、もっと困難な問題に取り組むのは、望ましくない。最初は、人間としての信頼関係を築くため、共通の基盤を持てるような課題から始めるのが、賢い方法と考えられる。そして人間同士の信頼関係が、深まり、広がるに従って、徐々により複雑な課題を取り上げることができる。このようにすでに知識のあるところから、未知の領域に入り、何世紀にもわたる敵意によって、おたがいを知らなかった現実から、同意のなかった課題を発見するプロセスに入ることができるようになる。

第九戒 対話に参加する人は、少なくとも自分と自分の教団あるいは、イデオロギー共同体にたいして自己批判のできることを条件とする。自己批判しないということは、自分の伝統がすでにすべての正しい答えを持っているという確信を意味する。このような態度があれば、対話は不必要であるばかりで なく、不可能である。つまり自分の伝統が、まったく誤ったことなく、解決、回答の必要な問題は不在であるならば、相手から学ぶことは、何ひとつないからである。諸宗教、諸イデオロギー対話において、参加者は、もちろん確信と一貫性を持たなければならないが、確信も一貫性も自己批判を否定するものではない。自己批判なしに、対話はありえないし、また真の意味での一貫性もありえないというべきではないか。

第十戒 それぞれの参加者は、相手の宗教あるいはイデオロギーを「内側」から体験するように努めることが必要になる。それは、宗教あるいはイデオロギーが、単に頭の問題ではなく、個人としてもグループとしても、精神、心、人間

全体にかかわることだからだ。ジョン・ダンは、「他者の宗教あるいはイデオロギー体験を通り過ぎ、新たな悟り、広がり、深さに到達する」と述べている。[Cf. John S. Dunne, *The Way of All the Earth* (New York: Macmillan, 1972)]. 自分自身の信仰の一貫性を保ちながら、相手の宗教、イデオロギーのシンボル、文化的媒介のスピリチュアルで情緒的なパワーを体験する道を発見する必要がある。相手の宗教、イデオロギーの「こころ」に触れて、そこから自分自身に戻るとき、自分自身が豊かに広げられたことを発見するだろう。

諸宗教、イデオロギー対話の営みは、4つのレベルで行われる。「頭、手、ハートと聖なるところ」―「手の対話」は、具体的に人類を助けるための働きを意味する。「ハートの対話」は、霊的、美的な対話で、相手の宗教、イデオロギーの美しさの表現を内側から体験するための対話。「頭の対話」は、真理を理解するための対話で、これらすべてを総合する第四のレベルの対話が、「聖なるところ」に触れるものである。

諸宗教、イデオロギー対話には、3つの側面がある。これについてより詳細な7つの段階の説明は、ここに記載されています。(www.dialogueinstitute.org/dialogue-resources).

まず第一段階では、おたがいに真実の姿を知り合うことによって、誤った情報（偏見）を洗い出すことができます。第二段階では、相手の伝統から有意義な価値を識別し、それを自分の伝統のなかに当てはめる努力をします。たとえば、仏教―キリスト教対話において、クリスチャンは瞑想の伝統の価値を深め、仏教徒は、キリスト教の預言的社会正義の伝統を認めます。いずれの伝統もそれぞれの教団において意味あるものですが、とくに相手の教団の特徴として評価されてきたものではありませんでした。もし私たちが、真剣に対話に取り組むならば、この第三段階に入ることができるでしょう。ここにおいて、おたがいに新しい現実、意味、真理を発見することができます。対話を通して、問いかけ、洞察、探ることで、それまで、全く気づかなかった、新しい、未知の分野に踏み込めるのです。忍耐をもって取り組む対話は、「啓示」、現実のベールを剥ぎ取るための道具であり、そこから行動することが問いかげられます。

この第一段階と第二、第三の間には、ラディカルな違いがあります。後者において、私たちは単に相手の伝統から、もうひとつの真実、あるいは価値を量的に受け入れるのではなく、自分の宗教、イデオロギーの自己理解の中に受け入れ、自己理解そのものが変貌することを意味しているからです。対話の相手も同じ立場におかれているので、相手も自己理解の中に新たに対話から得た価値を受け入れるのです。このような営みは、もちろんお互いが自分の信条を一貫して生きることを前提としています。しかし、対話によって各自の信条の根本的な軸が、今違った光で理解され、体験されます。対話がおたがいに、このような開いた心で誠実に行われると、たとえばユダヤ人はもっと本物のユダヤ人となり、クリスチャンは、もっと本物のクリスチャンになるのです。それはユダヤ教がキリスト教からの深い価値を**学んだにもかかわらずではなく**、まさにキリスト教が、ユダヤ教から**学んだからこそ**、生き方が深められたのです。これは、シンクレティズムの問題ではありません。シンクレティズムは、否定的な意味で、多様な宗教をそれぞれの宗教の整合性を無視してごちゃまぜにしたものですが、これは本当の意味での対話ではありません。

(日本語訳 弘田しずえ)